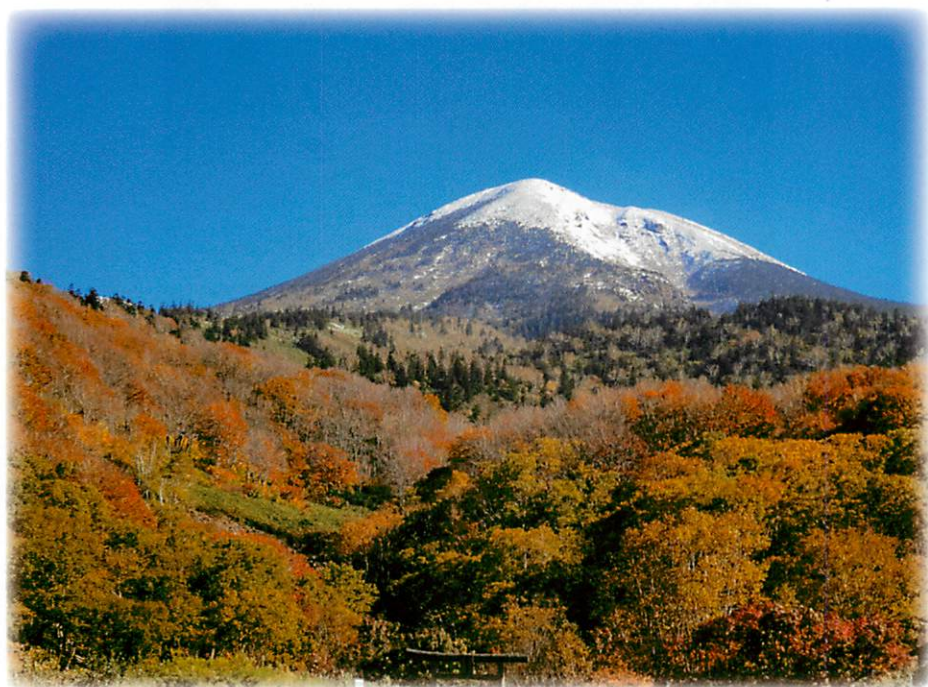


甲田の裾

KŌDA NO SUSO



2013

4号

松丘保養園の機関誌



平成25年度 物故者慰霊祭



10月24日、中央センター2階多目的ホールに於いて平成25年度物故者慰霊祭が挙行されました。

川西健登園長と石川自治会長が、祭詞の中で保養園内外の現況を御霊に報告し、三村申吾青森県知事、赤垣敏子青森市長代理の祭詞のあと、献花を捧げ、本園にて亡くなられた1640の御霊を慰めました。

(園長、自治会長の祭詞は本文に掲載)

甲田の裾 平成25年4号 目次

平成25年度物故者慰霊祭

祭詞 …………… 松丘保養園 園長 川西 健登 … 2

祭詞 …………… 入園者自治会 会長 石川 勝夫 … 6

松丘保養園の桜に思いをよせて

…………… 樹木医 逢坂 淳 … 9

盛岡病院を見学して …………… 給食 調理師 豊川 広明 … 15

短歌 白樺短歌会 …………… 18

「一目惚れ」の言葉で人生明るく …………… 三浦 喜美子 … 20

野の花の微笑み(7) …………… 比良 信治 … 26

川柳・俳句 …………… 伯龍 … 34

自治会日誌・編集だより …………… 35

人事異動 …………… 38

表紙写真 「冠雪の八甲田山連峰」叶 順次

写真提供 川西健登・伯龍・福祉室

「甲田の裾」バックナンバー(平成24年1号～)は
下記ホームページより閲覧いただけます。

松丘保養園のインターネットホームページ

<http://www.hosp.go.jp/~matuoka/>

祭詞

国立療養所松丘保養園 園長 川西健登

今年の青森は春の訪れが遅く、園内の桜も十分に開花しないまま打ち過ぎ、夏も肌寒く、妙に暑い九月から台風による被害が相次ぐ中、早十月も下旬を迎えています。

本日ここに、三村申吾青森県知事、および青森市長をお迎えし、入所者のみなさん、職員相集い、国立療養所・松丘保養園 平成二十五年物故者慰霊祭を挙行するにあたり、これまで保養園で亡くなられたすべての方々の御霊に対し謹んで祭詞を申し上げます。

松丘保養園では昨年十月から六名の入所者が逝去されました。昨年十一月T・Fさん八十九歳、今年一月K・Sさん九十歳、四月K・Kさん八十六

歳、五月Y・Nさん九十一歳、同じく五月Y・Sさん八十九歳、八月R・Mさん八十二歳、の方々です。これによりまして一九〇九年に北部保養院として本園が創立されてから一〇四年間に逝去されましたのは、入園者一、六四〇名、非感染児童十五名、生まれることなく亡くなられた子供さん二名で、このうち保養園の納骨堂に合祀されます御霊は一、一三七柱となりました。心から哀悼の真を捧げます。

この一年間に亡くなられた六名の方々のみなさん六十年から七十年を越える長い歳月を療養所で過ごされました。ご高齢でしたがともしつかりされ、計り知れない悲しみ苦しみのご経験によつて洗練されたような方々でした。偏見と差別の中で、人と

してはさぞかし悔しい思いもあつたことでしように、誰をも恨まずに黙々、淡々と明朗に生き抜かれ、平穩に莞爾として死をも受容されるお姿は崇高でさえありました。御霊前にただ頭を垂れるほかありません。

この方々から苦痛を訴える言葉を聞いた記憶が私にはほとんどありません。痛みを問うといつも「痛くありません」と答えられたK・Kさんが、ベットから雪の窓を見上げて「故郷の村に帰りたい」言われたのは印象的でした。直接の死因が癌の方もおられ、大変お苦しかっただろうと思うのですが、みなさん穏やかで、取り乱すということがありませんでした。R・Mさんは亡くなる前夜、朦朧とした意識の中で、「早く、早く、看護婦さん、早く行くべ」としきりに言われました。これはこの世の苦しみに耐えに耐えて来られたその果てで、一刻も早く解放されたいという叫びであつたのかもしれませんが、深く胸を打たれました。

Y・Sさんは委託診療の入院先で急逝されましたが、これはご本人にとつてもまったく予想外のことであつたでしょう。治療のためご本人にお願いして

了解を得てのことではありましたが、この保養園で愛する療友のみなさんとともに看取つて差し上げることができなかつたことをほんとうに申し訳なく思います。

今年一月に福西前園長の跡を引き継がせていだいてから、一人の入所者の命も失いたくないと願いつつ、できる限りのことはさせていた。だいたかと思ふ反面、敬愛する入所者の死を前にいたしますと、至らなかつた数々のことが示され、慙愧に堪えませぬ。

保養園では今年六月から、保険診療による一般地域住民の入院制度の運用が開始されました。これは「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」の精神に則り、「ハンセン病療養所における入所者の終生の療養を最後のお一人まで保証する」という最重要課題の実現のため、保養園を医療施設として存続させる構想の一環で、約二年前、福西前園長の時代に入所者自治会との間で合意決定されました。保養園一〇四年の歴史の中で初めてハンセン病以外の患者さんとして入院されたTさんはこのことをとても

喜んでおられました。ご家族によりますとTさんは保養園に入院してお世話になったことをお通夜の席で列席者に紹介するよう遺言して亡くなられたそうです。Tさんは元高校教師で、伊藤文男元自治会長がある高校でなされた啓発講演を生徒といっしょに聞かれたそうです。このようなハンセン病に理解のある患者さんとご家族をお迎えし一般保険診療の第一歩を踏み出すことができたことは松丘保養園にとつて有り難いことでした。乗り越えるべき課題も浮き彫りになりましたが、あくまでも「入所者の終生の療養を最後のお一人まで保証する」ための実践として、今後さらに一歩一歩進めてまいりたいと思います。

保養園は七十七年前の昭和十一年十月二十二日の深夜、大火災によつて全焼しました。自然災害が重なり、国土と人命の保全があらためて喫緊の課題として認識されている今日、保養園は平時と災害時とを問わず、人命・人権の尊重、心身の健康と安全の促進において地域社会にいささかでも貢献したいと願っています。保養園には困難な状況の中で長年に

わたつて入所者のみなさんが苦勞して育んでこられた弱者中心、相互扶助の営みが、貴重な経験として蓄積されています。私ども職員はこれを入所者のみなさんから日常的に教えていた、だいています。私どもは既に、災害時に井戸水の供給を受けたいとの隣接する町内会からの要請に応えて、具体的な協議を始めているところです。先の東日本大震災の後、全療協が被災者の避難施設として園の施設の開放を速やかに決議した英断に習い、今後は災害時に福祉避難所として園の施設を一般開放していくことも検討課題になります。

保養園の正面玄関にある交流ホールは、ご高齢の入所者のみなさんが地域社会から孤立することなく、職員、地域住民、来園者、ボランティアなどの方々と日常的な交流を持てる場として設けられました。この交流ホール本来の目的のために企画された「成瀬豊追悼展・叫び」は期間中六六一名の来館者に感銘を与えながら園内外に新たな交流を生み出し、あらためて保養園の歴史認識の重要性を確認させました。現在、その主要な作品は青森市のご協力で、お

隣の新城中で展示され、生徒、教師、父兄への啓発・教育のために用いられています。新城中の生徒さんとの交流がこれまで以上に活発になる機運が生まれたことはほんとうに有り難いことです。淡谷悠藏先生は「語り継ぐ人々のいる限り人は生きていく」と言われました。地域の若人がこの保養園で人知れず生きられた高潔な入所者の方々と語り継ぐ人になっていただけるように、真の交流が更に深まることを願わずにはおられません。

今年六月二十二日の前日に、「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼」の式典が厚生労働省の前庭で挙行されました。その碑には「ハンセン病の患者であった方々などが強いられてきた苦痛と苦難に対し、深く反省し、率直にお詫びするとともに、多くの苦しみと無念の中で亡くなられた方々に哀悼の念を捧げ、ハンセン病問題の解決に向けて全力を尽くすことを表明する」と刻まれています。国民全体の奉仕者である私も松丘保養園の職員一人一人はこの言葉を深く受け止め、国民の代表として日々の職務をとおしてこれを実現して行く覚悟を新たに

しております。

かつてここで苦難の生涯を精一杯生き抜かれ、この世を去られ天に在る入所者のみなさまの御霊は、今も、私たちの一言一句に耳を傾け、一挙手一投足に眼差しを注いでおられることを感じています。みなさまの厳しくも暖かい眼差しに心から感謝申し上げます。どうかこれからも、松丘保養園の歩みが、みなさまの願いと祈りに適ったものでありますように、私どもを励まし導いて下さい。

言葉足らず意を尽くさず、誠にふつつかな祭詞ではありますが、御霊の平安を祈りつつ、慎んでお捧げいたします。

平成二十五年十月二十四日

祭 詞

松丘保養園入園者自治会 会長 石川勝夫

山野の木々も色付きはじめ、菊花の香りと共に秋も深まりを見せております。

本日、ここに、創立以来本園に於て、病没された一、六四〇名、保育児童十五名、生まれることなく亡くなられた子供達二つの各霊位をお迎えし、親しく療友・職員相集い、そして今年は、三村申吾青森県知事と、青森市長代理として赤垣敏子健康福祉部長をお迎えし、慰霊祭を挙行するに当たり、謹んで祭詞をお捧げいたします。

思えば、皆さんには、不運にも不測の病魔におかされ、未だ病氣に対する理解が浅い中で、近代医学の夜明けもまだ遠く、その恩恵に浴することのなかった、暗黒と言われた時代に、石をもて追われる如く、家郷を捨て、流浪の日々に迫害を蒙り、果ては官憲の手に

よつて生木を裂かれるが如き、惨忍さで収容され、こ松丘での生涯を余儀なくされた方々であります。

患者を世間から完全に隔離することを唯一の施策とし、療養所とは名ばかりで、医療らしい医療も受けられず、厳重な監視のもとに、逃走防止のいばらの柵の中に閉じ込められ、更には苛酷な労働を強いられ、そのために手足に障害を重ね、視力を失い、絶望の闇の中で苦難と闘い、不幸にも黄泉の客となられたことは、生者必滅の理りとは申せ、誠に悲痛極りないものがございます。

また、本園の一隅に於て、未感染児童とさげすまれながら、短い生涯を終えざるを得なかつた保育児童の皆さんにとりましては、本当に悲しくも、はかなく、幼い身に辛い思いを味わうだけの一生でしかありません。

んでした。

平成十八年、関係各位ご出席のもと「生まれることなく亡くなつた子供達の為の慰霊祭」が挙行されました。この時の私共が抱いた悲愴感、怒り心頭に発する想いを忘れることはできません。

しかしながら、皆さんの尊い犠牲的なご生涯は、その後の医学に急速な進歩を促し、また社会情勢の好転と相俟つて、関係者の理解も深まると同時に、長年に亘る先輩皆様方から引き継いだ、運動の成果も加つて、医療・生活・その他全般にわたつて、園内の状況も大きな変化と進展を見せる様になりました。

私達ハンセン病患者・回復者に、筆舌では言い尽くせない忍従と辛苦の人生を強い歩ませた、らい予防法に基づく行政を含む、日本のハンセン病問題は、平成八年のらい予防法廃止に端を発し、平成二十一年四月一日より「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」の施行、平成二十一年、二十二年、衆・参国会において「国立ハンセン病療養所における療養体制の充実に関する決議」がなされるに至るまで、歴史的経緯をたどつて参りました。

本年六月より、保養園病棟に保険診療が導入され

ました。これを継続していくことにより、入所者の最後の一人まで、その療養生活が保障できる可能性があるということになります。

昨年、支部長会議において、医療機関である療養所内においても、政府の進める行政改革、合理化政策が強行されていることに対し、強く抗議し、改善を求め実力行使を断行することを決議した内容につきましては、未だ継続中です。

この件に伴い、私共中央交渉団は本年八月十四日、厚生労働省十階大臣室において、田村憲久厚生労働大臣への面談を実現させました。大臣見解として、厚生労働省として十分なハンセン病対策を実践していかねればならないと考えており、職員定員の問題等につきましては、厚生労働省が窓口となつて進めて参りますので、よろしく願ひいたします、と説明をされました。

それを受け、全療協としてはこれからの厚生労働大臣を中心とした、厚生労働省の作業を注視していくとし、物事がはかばかしく進まない時には、再度、厚生労働大臣面談を要請していくという決断に至りました。

松丘保養園創立以来、一世紀にわたる時が流れて

も、ハンセン病に対する差別・偏見はいまだに根強く、人々の心の中に残っております。

青森県より三村知事、また青森市からは赤垣健康福祉部長が慰霊祭にご臨席いただいております。啓発と言う意味において、こうして県知事や市長代理の方が私達の行事等に直接参加していただくことが、より有効な手段であると考えます。今後もハンセン病問題の全面的解決に向けて、積極的に取り組んでいただくことを願ってやみません。

一方、医療充実のためには欠くべからざる要件の一つであります、医師の充足について述べます。私達の療養所は将来にわたつても国立医療機関として存続させるといふ大前提がございます。松丘保養園入所者の不安感を払拭させ、将来構想の充実を図る上においても、副園長不在問題の解決に向け、努力しなければなりません。

施設長はじめ施設幹部は、医師確保のため、常に努力されておられます。今もそしてこれからも、この問題は私達にとりましても、最重要課題であることに変わりがございますし、国側を含め引き続き最大限の努力をお願いせざるを得ません。

今後、解決を迫られている諸問題について、毎年着実な歩みを持つて、活動の停滞をさせることなく取り組んでいかなければなりません。

一方、入所者が減少の一端を辿る中で、療養所の先行きどうなるのか心配と不安は尽きませんが、私達は最低限今の生活や医療を維持し、決して後退させないと言ふことを絶対条件に、誤りのない将来構想に結びつけていかなければなりません。

過去の歴史を決して風化させることなく、先輩諸兄弟の貴重な経験と体験にご教示を頂きながら、諸問題の解決に向け、施設・自治会が一体となって、今後の方向付けをしっかりと見極め、尚一層の努力を致さなければならぬと考えております。

何卒皆様の深いご加護をお願いする次第であります。

茲に謹んで追悼の意を捧げ、各霊位のご平安とご冥福を心からお祈り申し上げ、祭詞と致します。

平成二十五年十月二十四日



松丘保養園の桜に思いをよせて

樹木医 逢坂 淳

松丘保養園の桜の姿を見ていると凜としていてどこかに安心を覚えます。以前、同じような感覚を覚えた古木があります。一つは「北金ヶ沢の大銀杏」そしてもう一つは陸前高田の「奇跡の一本松」です。いずれも初対面で出逢った時の感覚は微妙に違いましたが「身を挺してなにかを語っている」ようなその姿はどこか亡くなった私の頑固な祖父と重なりここ松丘保養園の桜にも同じ雰囲気を感じられるのです。この桜たちは様々な時代を生き抜き人々と語らい今にいたっております。青森市内は第二次世界大戦で空襲にあつて焼け野原になつてしまつたせいかこのような染井吉野の大木はここにしか存在しません。又、戦時中には「こんな時に花見などけしからん」として切られたり抜かれた桜も多

かつたと聞いております。でも様々な時代を駆け抜け今尚凜として立っている姿は奇跡としか言いようが無いです。きつとこの桜たちを一生懸命お世話をしてきた方々達の努力のたまものだと感じております。

今回、松丘保養園の貴重な桜をお世話する機会に恵まれました。私が樹木医になつたきっかけもやはり古木からの出会いに始まりました。人間は歳を重ねるごとに自分を論してくれる年長者は減っていきます。そして長い人生の中には苦しい時代もあり自分の方向性を見失うこともあるかと思われま

す。私にもそんな苦しい時期がありました。そして私の場合は一本の古木との出会いから未来の人生がひろがりました。樹木は黙してなにも語らないので

すが、その幾多の困難と人々を見つめて傷つきながらも堂々と立っている姿を見た時、亡くなった明治生まれの私の頑固な祖父を思い出しきつく諭されたような感情を覚えどこか気持ちが悪くなったことを覚えております。その出会いがきっかけとなり現在の道に進みました。そして今回このような事に携わることが出来ることに感謝して止まない思いでございます。

さて今年九月にここ松丘保養園の桜を調査させて頂きました。ここ松丘保養園には実に立派な木々が存在します。樹木の解説と共に少しご紹介させて頂きたいと思えます。まず園内の桜スポットとしてとても素敵な場所があります。それは三内霊園の池側に面した園内でも特に古いと思われる桜並木です。桜は花が一斉に満開に咲いている姿も素敵ですが、その花が風に吹かれ散っている姿も素敵です。その散った花びらが水面いっぱいに広がりピンクのじゆうたんのようになる姿を「花いかだ」と呼びます。弘前公園の外堀でもこの「花いかだ」を一目見ようとして多くの観光客、カメラマンなどが賑わっております。



ここ松丘保養園の水面に面した桜並木も弘前に負けないくらい「花いかだ」が見られるのだろうと春になるのを楽しみにしております。

さて話は少しそれますが、花見の文化を庶民に最初に広めたのは八代將軍 徳川吉宗（暴れん坊將軍で有名な）で墨田川の川岸に植えられました。桜を川岸に植えたのは庶民に花見文化を楽しんでもらうと言う理由と墨田川が決壊しないように花

見にきた庶民に川岸を踏み固めてもらおうと言う意味もあつたようです。松丘保養園には水面に面した桜がけっこう多く残っております。墨田川に思いを馳せ桜めぐりするのも面白いかもしれません。そして、もう一つ余談ですが時代劇「遠山の金さん」の背中に彫られている入れ墨「桜吹雪」は染井吉野と言う説が強いのですがこの時代にこの桜は無かつたことから違うのではないかと言われております。では実際に彫られていた入れ墨はなんだったのでしょうか？諸説言われておりまして「なにもなかつた」「若い頃惚れていた女性の首」など諸説あります。個人的には「惚れていた女」も良いのですが金さんにはやはり「桜吹雪」が似合うような気がします。

ここで桜以外の樹に関しても園内には立派な古木が存在しておりますのでいくつかご紹介したいと思います。まず一本目は「さくら保育園」のそばにあります。園内でも一番大きな木の「ケヤキ」です。ケヤキはあこがれの木と呼ばれており、木の目が美しく堅いわりに狂いが少ないので建築、家具材としてもとても優秀です。ケヤキの古名は「槻」

「つき」と呼ばれ「槻」「のり」は(てほん)や(ただす)という意味です。手本となる槻、昔の古民家の屋敷林にはよくケヤキが植えられておりました。きつと縁側から子供とケヤキを眺め「ケヤキのようにならなければならんぞ」と論している姿が目につかびます。この園内の子供達がケヤキの見つめすくすくと健全に育ってもらいたいと願っております。二本目はこの大ケヤキのすぐ側に「コウヤマキ」という立派な株立ちの木一本があります。この木は過去にとっても苦勞した木なので次にご紹介したいと思えます。「コウヤマキ」は日本の固有種です。固有種というのは世界中どこを探しても日本にしか存在しないと言う意味です。「コウヤマキ」はかつて北半球に広く分布しておりました。その証拠に200万年前の化石がヨーロッパで見つかっております。その「コウヤマキ」がなぜ日本だけに生き残ったのかと言うと氷河期に北半球において日本だけは山岳の上部以外は氷河に覆われなかつた為生き残ったと言われております。中生代のジュラ紀(白亜紀(約2億1000万年)〜6500万年前)という樹木としても古い時代に出現し、そして数々

の気象変動を経験し現在日本にのみ生き残りそして松丘保養園の敷地に存在するこの「コウヤマキ」を見ているとなにか考え深いものを感じさせられます。



最後の一本は「スギ」の木でございます。「スギ」は500年以上も生きる寿命のとても長い木です。又、「スギ」は天にまっすぐ伸びる為、神が降臨する場として昔から神社に植えられてきました。

松丘保養園の神社の入口にも園内及び青森市内でも最大級の樹齢100年以上の立派な「スギ」の木があります。青森県内の多くの古木は神社に存在し、私も青森県内の古木を巡り神社を多く調査したことがあります。古い神社に行くと鳥居がわりに大きな樹木を参道の入口に左右二本植えられている光景をよく目にします。樹種は「マツ」、「モミ」、「イチヨウ」などいずれも高木又は寿命が長い木が植えられておりました。長くその地域に神様が降臨することを願い植えられたのかもしれませんが。松丘保養園の神社入口にある大きな「スギ」は一本しかありませんが鳥居がわり又はご神木として植えられたのかもしれませんが。ここで「スギ」の生き様を少し紹介したいと思います。「スギ」も「コウヤマキ」同様日本の固有種です。第三期（6500万年〜180万年前）の温暖で湿潤な気候下では北極圏まで分布しておりました。しかしその後寒冷で少雨な気候に耐えられず衰退縮小していき現在は日本にのみ生育しております。「スギ」の木は長生きの為、何千年も生きる物もあり人々に神々しい思いを抱かせます。ではなぜ「スギ」は長生きをする

のでしょうか？「スギ」の種子はとても小さいです。このような小さな種子では「クリ」「トチ」の実などに比べ持つている栄養が少なく、落ち葉が厚く覆

われ土まで到達するのにかなり根を伸ばさなければならぬような場所では根を作る栄養が無くなり土に根を下ろせず枯れてしまいます。つまり子供に持たせるお弁当が少ないのです。この為「スギ」の子孫を残す戦略は少し変わっていて、できるだけ長生きして身体を大きくし風や雷に打たれるリスクを増やして自分を倒れやすくします。やがて倒れたその大きな身体は種子たちを育むベツトとなります。このベツトは病原菌が少なく湿っていて競争相手も少ない「スギ」の種子には快適な環境となり種子が落ち新しい命をつなぎます。死ぬことにより生をつなぐその生き様に私はとても魅力を感じます。

最後に過去に私が青森県内の樹木を調査した中でとても印象に残った樹木を一本紹介したいと思います。それは青森県田舎館の城址の片隅にある墓碑がわりに植えられた一本の「サイカチ」という木です。この「サイカチ」を語るには過去の歴史をさ

かのぼらなければならぬのでしばしお付き合い下さい。

さて、天正十三年（1585）五月、田舎館千徳氏五代である掃部政武の代に、田舎館城は大浦（津軽）為信が率いる3,000騎に攻められ、城主政武以下330人余が自害・討死して落城しました。

この戦いで政武の妻である於市は逃げ延び、その後時が流れ討ち滅ぼした為信が津軽統一後の慶長六年（1601）三月、敵味方合同の清水森大法会の際、祭壇の前に進み焼香を終えた政武の妻である於市はその場で自刃して果てたといえます。

伝承では為信の攻撃で落城した田舎館城兵330余名を埋葬した際の供養樹であるという「サイカチ」の木。一般に墓碑として用いられる樹木は青森県一円を調査した時、「イチヨウ」、「スギ」、「イチイ」と一般的には長生きで丈夫な樹木が多いのになぜマメ科の腐りやすく倒れやすい木を選別したのかを考えてまいりました。歴史的背景を見ても埋葬したのは政武の妻かと思えます。全国的に「サイカチ」の植えられる意味を調べると魔除けとかの意味で城の鬼門や裏鬼門に植えられ災いが

入ってこないようにする意味をこめられることが多いです。でも自害するような気概をもった方なのでわざわざ占領された元自分達の城に新しい城主の機嫌をとるため魔除けの樹を墓標として植えることはないのではないかと考えます。

ではどんな意味が・・・ 答えは意外なことから解りました。図書館で色々調べてみますと「サイカチ」は戦勝祈願の縁起を担いで「もつとも勝つ」とか「再度 勝つ」という意味を込めて植えられていた地方があったのです。

このことから私は、死んだ旦那や兵士の為たった一人で闘った武家の妻の気概というものを感じ感動したわけです。一本の木にも色々な思いが込められているもんだなあーと感じた一本でした。

このようにたかが樹一本でも人々の様々な思いを現在に繋いでいるものが沢山あると思います。ここ松丘保養園の木々も同様に人々の思いを繋いできた樹木が沢山存在します。染井吉野の寿命は約70年と言われております。この園内には70年を超す桜が沢山あり大変貴重な空間です。この桜を少しでも良くしたい、単なる延命処置というもので

はなく園内の桜や木々に思いを寄せた人々の気持ちを後世の人に繋げるという意味でも長く見守っていききたいそう思います。長い文章にお付き合い頂きありがとうございます。



近隣住民も楽しみにしている桜並木（写真は2008年）

盛岡病院を見学して

給食 調理師 豊川 広明

来年四月実施予定の中央配膳、ならびに嚥下食を実施するため栄養士二名と調理師全員で盛岡病院の見学に行きました。業務をやり繰りし、三人ずつ四班に分かれて実施しました。

盛岡病院は盛岡インターにほど近い住宅街にあり四病棟二七〇床の地域の中核病院です。松丘保養園との大きな違いは「病院型施設」と「療養型施設」ですが、共通するのは患者様も入所者様も高齢な方が多いということです。

中央配膳と嚥下食を実施するために、他施設の見学に行こうという話が出た時に、栄養士から盛岡病院を勧められ、個人的には『何故盛岡???』とというのが率直な感想でした。

なぜなら私は、作業手を五年、調理師十八年：しかも全て松丘保養園で！！ 近隣の施設見学もしたことのない自分が、いきなり県外の施設に行くなんて思いもしなかつたからです。

まして、今の給食棟が旧3センターに移った際の厨房機器の配置図を青写真で見ても、厨房の面積が狭くなってしまうことで自分達の立ち回りが想像できずとても不安でした。

しかし、実際見学してきてからは『この狭いスペースで???』から『このスペースでOK!』と考え方が変わりました。

今回の見学で私が一番感銘を受けたのが、栄養管理室長から受けた「嚥下」についての講義でした。

嚥下食については、高齢化社会に突入している近年では、重要性が問われているようです。

健康なときには当たり前だと思われる「口から入り食道を通り胃に落ちる動作」が「加齢」によりできなくなり、本来であれば食道に流れていく食物が、気管に流れ落ちていく実際の誤嚥の様子を、パワーポイントで解説していただき嚥下食の大切さを知ることができました。

誤嚥の映像を見るまでは「柔らかければOK」くらいにしか思っていなかったのですが、「滑らかで飲み込む時にバラバラにならない食事でなければいけない」と嚥下食の認識を新たにしました。

盛岡病院では、患者様の嚥下造影の時に栄養士と調理師も参加し嚥下の状態を把握し、その人に合った食事を一緒に考えているそうです。その話を聞いたとき、作り手は食べる相手の咀嚼状況を知らぬまま食事を提供するのではなく、実際の状況を把握して食事を提供する必要性があることを痛感しました。

もう一つ素晴らしいと感じたことは、嚥下

食の味や食感はもちろん、食中毒菌の培養をして菌の発生がないことを確認するというデータを作ったことです。そのために、調理師の手指の清潔・調理機器・食器にいたるまでの衛生管理の徹底を図るところは見習うべきだと思いました。

「ここまでたどり着くまでには何度もミーティングと試行を重ねた結果だ」と調理師長から聞いたとき、調理師が一丸となり試行錯誤しながらゼリー食の研究をしている自分達



握り寿司を模したソフト食



ソフト食調理

の姿と重なり、これから松丘スタイルのゼリー食を進めて行くうえで大変参考になりました。

また看護部門に協力を依頼し一か月ほど病院給食を検食してもらい、味や盛付けなどに関するアンケートを行うなど、より良い食事の提供を目指す姿勢に頭が下がりました。

今回の訪問で盛岡は病院型、松丘は療養型と違いはありますが、安全且つ美味しく食べられる食事を提供するという目指す目標は一緒なんだと感じました。

「医食同源」と言います。病気を治療するのも日常の食事をするのも、ともに生命を養い健康を保つために欠くことができないものです。

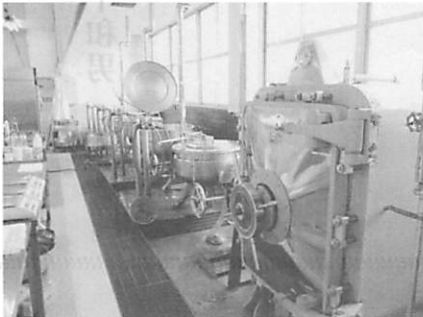
初めての施設見学に「カルチャー・ショック」を受けましたが、今の率直な感想は『盛岡病院で正解!』。中央配膳と嚥下食は当園でこれから取り組む重要なプロジェクトです。「食事は給食で考えて」だけではなく「食事」を通じて各部門の連携を密にすることが大切だと思いました。他の施設をただ真似るのではなく良い物は取り入れ、「松丘は松

丘」のスタイルを確立して他の施設から目標とされる栄養班にしていきます。

今回このような企画を提案してくれた栄養班長と栄養士、そして調理師全員を研修に参加させてくださった施設長と快く引き受けていただいた盛岡病院の皆様へ感謝いたします。



一般食調理風景



衛生管理の生き届いた調理場

短歌

白樺短歌会

ありがとう卒寿

滝田 十和男

敬老の日に招かれて園長の手づから受けぬ卒寿祝ぐ品
六人のなかの一人に加へられ卒寿迎へし席ありがたし
遙かなる思ひ引きづり生きてきて卒寿を祝ふ品を戴く
満席の人らはなべてこの園にいのち紡ぎて老ひ深めたる
病む日日の憂さを忘れていたりけり卒寿迎へし敬老会に
なんとといふ幸せ者よ卒寿まで生かせ貰ひし思ひしみじみ
なにごともし力及ばず過ぎてきて今晴れ晴れと卒寿迎へぬ
亡き妻も生きてありせば喜びも一入ならむ卒寿祝ぐ席
乏しかる暮らしを共に凌ぎたるに我は孤りの卒寿迎へぬ

級友の多くは戦地に赴きしまま還らざり病む我は生きて
ふるさとの拡大写真に写されて届けりわが家の古き墓処も
阿武隈の山のほとりを流れきて中津川とぞ村の名とする
帰るなきふるさとなれど目に浮かぶ山と山との狭間の村を
川下の丘に代々受け継ぎしわが家の古き墓どころあり
ふるさとの村の興りは朧ろにて我が家の墓碑に辿るほかなく
側面に正徳四年と刻まれし先祖の墓碑に憶ひはるけく
苔むして並ぶ墓石に刻まれし享保の世にも村はありたり
それぞれの家に固有の墓地ありし昔のよすが今にとどめる
鄙びたる村の昔を語るがに傾きかけし墓碑の数々
夢に立つ昔の村のおもかげを異郷に辿るとりとめもなく
病む老ひの憶ひは遙かふるさとを離れて早も七十六年

「一目惚れ」の言葉で人生明るく

三 浦 喜美子

昭和三十七年九月退園し、十月中旬に上京し結婚しました。

着いた所は足立区でも埼玉県との県境の所でした。一面の田んぼ、茅葺屋根の家が建ち並んでいました。ここが、東京かと驚き、言葉もありませんでした。東北の田舎より、東京の田舎に越して来た心地でした。

主人は昭和三十四年に全生園を退園し、職業訓練所で塗装科を学び、会社勤めを経た後、思い切つてこの場所で独立したばかりでした。

町会長さんに二人で挨拶に行ったところ、お前達は外者（よそもの）一号で解らない事は何でも聞きに来るようにと言ってくださいました。

私達二人は「訳あり」でここに逃げて来たのでは

と、耳に入つて来ました。このままでは押し流されたいと思ひ、二人で相談して、誰と会つても必ず挨拶をし、頭を下げる事にしまして実行しました。

ある日、私達より少し年上の男の人が来て、稲刈りを手伝つて欲しいとの事でした。夫婦で工場もやつており忙しく、百姓の仕事が遅れたとの事でした。稲刈り、稲上げ、脱穀まで二人で手伝う事になりました。私は百姓はお手の物でしたので、大変喜んで貰えました。外者一号をよくぞ頼んでくれたと有り難く思つたものです。

私は上京する前に、お米、味噌等々を送つた、その他にもお米、野菜等が沢山ありました。主人の実家から送つてくれたものです。

主人が会社勤めの時、この辺りに仕事に来ており、

独立するときは、此処でと決めていたようです。父に相談して古い狭い家を買って貰ったとの事でした。

主人の父からは実家に来る様に再三勧められましたが、弟が結婚し子供二人がおり実家を継いでいましたので、今更、長男の主人が家に帰る事は出来ないと。義父は、親戚・友人も居ないこの土地での生活は長続きしないと思い、又結婚出来るとも思っていないかったので、お義母さんは家を見ながら、また私と会う為に上京して来ました。

私には内職でもして息子を助けて呉れるように、仕事がなくても決して無理せずノンビリ生活するように、大金を渡して帰っていきました。有り難く涙が止まりませんでした。

お正月は主人の家で過ごしました。嫁いだ妹達と、豊川稲荷神社、伊勢神宮、熱田神宮等お参りさせて頂きました。近くの三ヶ根山にも行きました。公園になつており、ホテルが建つており、賑わつておりました。その一角に東條英機のお墓があるのには驚きました。この人の名前は年配の方々が知るのみでしょう？

一週間ほどお世話になつて帰つてきました。明治神宮、浅草、西新井大師、成田山等お参りしました。神、仏にすがるしかなかったのです。

一月下旬には電話が入りました。名刺も作り、近所に配りました。二月に入ったある日、昨年農作業を手伝つたご主人が訪ねて来ました。主人の仕事、内職の仕事まで紹介してくれました。本当に有り難く感謝の気持ちで一杯でした。

上京して三年目頃より団地が建つ様だと噂が広まりました。その通りになり農家の方々の土地が全部東京都に売却されました。各家庭差はあるものの、汗もかかずに大金が舞いこんで来たのです。

茅葺屋根が見る見る内に瓦屋根の御殿のような家になりました。奥さん達は綺麗になり、北海道から九州まで旅行三昧です。

当時は、沖縄は本土に返還されていませんでした。また各グループで温泉巡り等楽しんでおりました。

ご主人達は、都の職員としての仕事が決まつておりました。大金が入った外に、職員（公務員）として働くことが出来たのです。時間に余裕が出来、自

然と飲み屋へと足が向き、其の中には二号さんに家を建ててあげる人までいて、旅行三味の奥さんが気がついた時は後の祭りでした。

またある家では、自分の家の外に、二男、三男にも家を建ててやり、自分達の食べる米は作ると、埼玉方面に田んぼを買い、家の前は畑にして野菜を作っておりました。使い途の差に、私は勉強になりました。

一面の田んぼの埋め立てが始まり、道路も整備され、バス路線も増え、団地が建ち並びました。銀行、郵便局、スーパー等も建ち、個人商店も揃いました。さすが東京、上京して来た時とは一変しました。あまりの変わり様に驚きました。東京の田舎、ヨソ者一号共に返上しました。

主人が世話になっている工務店が町内に新築しました。新築祝いに一日目は家主の親戚一同、二日目は友達、工務店職員一同、主人も招待されました。三日目は町内の方々が招待されました。主に女性が出席とのことでした。私も招待されました。初めてのこと、嬉しく楽しみでした。私の隣には見た事

のない、私と同じ年位の男性でした。その方も同じ気持ちだったのでしよう。不思議そうに見ていましたが、一言も話すこともなく、楽しみにしていたのに、がっかりしました。

小用の為、席を外して戻ってみると驚きました。その男性が話しかける事。私のことを誰かに聞いたようでした。無駄口を聞かないように簡単に笑いながら答えたら、その方の奥さん、おばあさんはよく話をする人達でした。バス停の前の家の人だったのです。

ある日、そのご主人が我が家に来ました。日曜日で主人も仕事休みでお茶を飲んで居ました。

主人に仕事の依頼だったのです。その仕事が終わると又仕事を頼みに来てくれました。工務店の仕事ばかりでは暇でしたので、大変有り難く、今後ともよろしくと、頼んでおりました。

そうした中、ある日おばあさん（母親）が来ました。「いつも息子がお茶を頂き有り難うございます。迷惑じゃないですか」とのこと、驚きました。

私は主人共々有り難くお願いしておりました。

おばあさんは、「よかった、安心した」と言いまして。

すると、工務店の新築祝いの時、貴女のそばに座った息子が、帰る早々、貴女に一目惚れしたと、上機嫌で帰って来たとのこと。

新築祝いには、お嫁さんが出席の予定でしたが、実家で急用が出来たため、息子が出席したとの事でした。

このことは、私と貴女の二人だけの秘密ですからね、決して他言しない様によろしくとの事でした。

『一目惚れ』の言葉を深く考えることもなく、ただ人並みに世間から見られていると思い、大変嬉しかったです。元気百倍になり、これからより以上に楽しく一生懸命に働く事が出来ると思いました。

私達二人は元ハンセン病患者、菌が無くて退園出来ても、後遺症は元に戻りません。私は婦人会に入るように誘われましたが、皆様と顔を合わせるのが辛く、返事を延ばしていましたが、『一目惚れ』、この一言が嬉しくてすぐ返事をしました。この時から気分が明るくなりました。

私は病気の再発を心配し、早寝、遅起きを心がけました。狭い家で、又廻りは人が通るだけの土地掃除する所もなく、ゆっくり起きても仕事には充分間に合いました。

テレビは上京して一年後に買いました。主人の仕事も順調で、時には私も手伝う事もありました。廻りは立派な家が建つたのに、我が家だけが取り残されました。家を建てることも出来ませんでした。借地（二十年）の為、どうすることも出来なかつたのです。廻りの土地は高く、私達には手も足も出ません。

昭和四十二年に埼玉県に土地を買いました。当時は八潮村でした。四十六年に家を建てた時は八潮町になっておりました。

四十八年一月下旬に引越した時は、八潮市に昇格しており、聞くところによると、四十八年一月十五日に市になったとの事でした。

土地を買った時の面影は全く無く、近くには団地や会社が建ち、バスの便も大変良くなりました。

一年か二年後には個人病院も出来、大変助かりました。廻りは共働きの若夫婦が多く、自分達の生

活に追われているので、廻りを気にする人も少なく、私にとつては、嬉しく喜ばしい限りでした。

家の前には、魚屋、その隣は文房具屋、その又隣は金物店、私の家の一軒おいてクリーニング屋、隣は酒屋、その隣は糸糸屋、ラーメン屋と続き、買い物には不自由しませんでした。

月日が経つにつれ友達も出来、何時の間にか四人のグループになっていました。時にはお茶を、年三〜四回位は食事に出かけました。又年一回は旅行にも行くようになり、よく働き、よく遊んだ頃でした。

お正月の隅田川の七福神巡りも楽しかったし、秩父三十四観音霊場を友達のご主人の車で、年一回四年かけて廻りました。河川敷で弁当を食べ、その楽しかったこと、一生の思い出として懐かしく思い出しております。

二十年間の借地権を前金で大金払っていても、毎月地代を払っていたのです。大家さんに毎月持つて行くのがいやで、一年間分払っていました。

十年間住んでいる中、三回も値上げをされました。私達は不動産に無知な為、言われるまま払っていました。狭い土地でも週一回は大家さんが見回りに来

ていました。

八潮市に引越してきて、私は大の字になって喜びを嘔みしめました。土地も含めた持ち家に住める喜びは言葉に表すことは出来ません。

一生住む積もりが、三十八年間で終止符。これもまた人生でしょうか？

引越の挨拶に婦人会会長さんに言われたことは今でもはつきり覚えています。

「貴女は此処に来た時は不便で苦勞をし、今やつと都会並になったのに、又不便な所に行くなんて、開拓者だよ。たまには遊びにくるように」と言つて頂き嬉しかったです。後で連絡するから必ず遊びに来て下さい、と別れました。

引越してきても内職を続けてやる事になりました。社長さん夫婦も時々遊びに来ました。近くに引越して来て、会社に通つておりました。ところが、半年位経つと、社長さん達は住まなくなりました。運転手さんに聞いた所、奥さんが体の具合が悪くなり会社に戻ると元気になるとの事でした。八潮

の水が奥さんには合わなかったようでした。上品なやさしい奥さんで新築祝いには私も招待され、喜んだのもつかの間でした。

再入園して二人共、当時の生活を振り返る事は一度も無かったのですが、今年（平成二十五年）の正月に当時の話になりました。私はその時、すっかり忘れていました。あの旦那さんに『一目惚れ』したと、おばあさんに言われたことが懐かしく思い出されました。生まれて初めての言葉、その時何故もつと喜ばなかったのか。ただ世間並みに見て貰えた、その喜びで頭が一杯でした。

おばあさんとの約束を四十六年間も守ったのです。いや、忘れていたのです。そのおばあさんは百十歳は過ぎていて年、きつとあの世で、よく約束を守ってくれた、と喜んでいそうな気がします。

それとなく主人に、急にあの旦那さんが仕事を紹介してくれるようになって不思議でした、と言ったところ、主人曰く、「他にも二人ほど仕事を紹介して貰ったので、何とも思わなかった」との事でした。その方々には仕事が終わると、ほんの気持ちば

かりの礼をしてきたとの事。私は全く知りませんでした。ビールやお酒だったり、ウイスキーだったり、あの方々には助けられたとも言いました。

主人に笑いながら話そうかと思いましたが、止めました。その懐かしい思い出を主人に壊されるのです。

「その人はきつと目が悪かったのだ」と。



野の花の微笑み^{ほほえ}

比良信治

(7) 江差を訪ねて

八甲田連峰に昇った太陽が、広い療養所に朝早くからざらざらと照りつけていた。蟬もまだ休んでいる朝方に、療養所の売店脇に一台のタクシーが待っていた。

佐久間文太郎は、昨夜おふくろや同室のおばあさん方とお別れしてきたので、宿舎を出てまっすぐに売店を目指した。清水恵子は、東側の長屋住宅より出て、タクシーの前でひと足早く文太郎を待っていた。

二人はタクシーに乗ると、一路青森駅へ向かった。駅の売店で折詰弁当を二つ買って、二輛連結車の最後尾の客車に乗った。ローカル線の、その客車の中頃に、小さなダルマストープがついていた。

「ほおー」と、二人は期せずして発して、微笑ながら、ストープの見える座席に腰をおとした。

六時に津軽線が発車した。車内には五、六人の乗客が乗っていた。窓を開けると、どこまでも青い稲の穂が続

く水田だった。蛙の声が耳に入ってきた。やがて漁港のある蟹田をすぎると、中小国駅に着いたが、この駅が昭和六十三年三月より青函トンネルが開通して、海峡線の分岐点となる駅だった。

終点の三厩駅は津軽半島の突端の竜飛岬の根元にある漁村である。今や夢の青函トンネルを本当に着工しようというプランが本格化してきたところだが、岬はまだ静かだった。村には仏像を造る円空和尚が建立した義経寺がある。崖下に連なる漁師町のはずれに船着場がある。小型のフェリーボートが乗客を待っていた。船の胴体に「まつまえ丸」の文字が見える。三二〇トン。対岸の北海道の福島港と一日三回往復している。船に乗るトラックと乗用車が一列に並んで、大きな口を開けた船体に入っていく。

文太郎と恵子は切符を買って船内に入ると、夏休

みに入つたせいか、親子連れの姿が見えた。まもなく、「天候も良く、波もおだやかで、予定通り九〇分で福島港に着く」と、船長が津軽弁でアナウンスした。

福島町の町は恵子も両親と共にかつて幼い頃に生活した町である。町はずれの墓地には両親の墓もある。しかし、江差の姥神神社の祭典を見るためには急がねばならない。江差の帰りに、恵子はお墓参りをしようと決めていた。

さて、福島に着いて、松前まではバスで向かった。松前のお城もバスの中から眺めながら、江差へ行くバスに乗り継いだ。ようやく江差に着いたのは、十二時半ごろであつた。

この長いバスの中で、恵子が学生時代の修学旅行で江差に行った時に、公民館で町のおじさんから聞いた、姥神神社にまつわる伝説を想い出して、文太郎に語つた。文太郎は本道でも最も歴史の古い江差の町のお話ということで、耳をそばだてて聞いた。

「おりんさんというお婆さんが、困っている人たちを助けた話から始まるのよ。そのおりんさんが、魚がとれなくなつた時に、浜で自分がつくつた網で小魚をとり、昆布を拾い集めて、暮らしに困っている人たちにめぐんで助けていました。そのために村人からはやさしい、あたたかいお婆さんだと言われていました。このおりん

さんは、江差の港の前にある鷗島にあるお社を深く敬つていました。この鷗島をカムイシリ、神の島と村の人たちは呼んでいました。

ある年の春に、その鷗島から強い光がおりんさんの家に注がれて、一人の高貴な翁がやってきました。その翁がおりんさんに、日頃の労をねぎらい、白い水に入つた瓶を与えて、『この瓶を海中に投じなさい。春ごとに群れ集る小魚をとつて、村人の糧にするがよい』と告げて姿を消したのです。

我に返つたおりんさんは、教えのままに壺型の瓶を海中に投じると、にわかには海の色が白くにごつて無数の小魚が次々と浜に押し寄せてきたのです。村人は喜んで漁獲したが、毎年春になると、その小魚、鰯の恵みによつて、栄えたというのです。

のちに村人たちはおりんさんの徳をしのび、おりんさんの家の跡に小さな祠（ほこら）を建てて、その御霊をまつた、というお話です」

「ああ、鷗島のそばに立つ瓶子岩（へいしいわ）は、そのおりんさんが海に投じた瓶が岩になつたというんだね」

「そうよ。現在姥神神社の境内には折居社という祠があるのよ。実際に安永年間という、八百年前のお話で

あつたというのよ。つくり話にしても本当らしい歴史のあるお話ねー」

文太郎も思い出した。松前藩が一時期、徳川幕府によつて、松前や江差地方から追い出されて、奥州の梁川に転封させられた事件があつた。文太郎が恵子にその話を語つた。

「幕府は松前藩がどうやつて暮らしているのか、と不思議に思つていたんだね。当時は米もとれなかつた時代。実際は金山からの収益と、アイヌの人たちとの交易で儲けていたのです」

文太郎の話が続いた。

「松前藩はこの姥神神社を松前の守護神としてあがめて、鯨の大漁を祈願したり、藩の隆盛を祈願するために、祭典は町民と協力して行つていた。ところが、藩主が神社に揮毫して奉納したアイヌの神を敬う額の文句に、幕府は言いがかりをつけてきた。それは『降福弘夷』と書いた額を、幕府巡検使が『福を紅夷(赤蝦夷、ロシアのこと)に降ろす』ものと読んで、ロシアに頭を下げるとはけしからんと、いいがかりをつけて、転封させたのです。しかし、幕府は直轄してみると、アイヌ人を理解しようとせず、常に衝突が絶えず、何年かすると元の鞘に戻つたが、松前藩も大変だつたようだねー」

「さすが、歴史に詳しいのね。平安な当時としては大事件だつたでしょうね。姥神神社もさすが歴史があるんですねー」

恵子も驚いた。文太郎とのやりとりで時代は昔々にさかのぼっている間に、江差に到着したのである。

文太郎は恵子に約束させて、かつて亡き父親と泊まつた町の中心地にある丸太旅館にたどり着いた。

二階建ての木造建築だが、瓦葺きの大きな旅館だつた。玄関一帯に幕が張られ、両脇に大きな「姥神発祥」の文字が印された提灯が両脇に設置され、玄関前に長椅子が二列に配置されていた。道路には水が撒かれて清掃されていた。

文太郎と恵子が、玄関に立つ、羽織紋付きの主人に挨拶すると、髪の毛は白髪だが、鼻の下に黒いチヨビヒゲがあり、背をこごめて笑顔で、揉み手をして迎えた。

「ようく遠い所からおいで下さいました。二十年前にもおいで下さいましたか、それはそれは恐縮、姥神様に感謝してお迎えいたします」

すると、玄関の中にいた和服を着たおかみさんが、朱塗りのお盆に蓋付きの茶碗を二つ持つて差し出し、丁寧に挨拶された。

「この度はご夫婦おそろいでお越し下さいまして、光

栄の至りです。何とぞ、ごゆつくりとお祭りを楽しんで下さいまし」

紫がかつた青地の和服に、金銀の混じつた帯が鮮やかであつた。それにしても二人は夫婦とみられたが、否定もせずにくぐり抜けたのである。

金銀模様のついた茶碗を受けとつて椅子に座ると、ぷーんと酒の匂いが鼻につく。中味は冷酒であつた。

文太郎は疲れもあつて、冷たい水を飲みたかつたので、一気に冷酒を飲み干してしまつた。

「うまい」と思ったが、五臟六腑にしみ通るようにくぐくうと音を出しながらお腹に入り込んだ。そばにいる恵子が、ふと文太郎の方を見て、

「大丈夫？ お腹が空いているんじゃないの？」

「いや、旅の疲れも吹き飛ぶようだよ」

そばにいる旅館の主人は微笑ながら、
「もう一杯いかがでしょう。おかわり、といきましよう。お祭りですからね。今晚は夜通しのお祭りですよ」

主人のチヨビヒゲが踊つて見えるのは、文太郎も酔いが廻つたようで、口まわりが滑らかな主人は続けて言つ、

「祭りの歴史は三五〇年と古いんですよ。江戸時代の北前船が、大阪や京都の文化、芸能を江差に持ちこんで下さつたんですよ。御輿渡御（みこしときよ）は終わり

ましたが、今日からは十三台の山車の出番です。京都の祇園祭りに負けない山車が豪華に出陣ですよ。我が家の前を通りますから、よろしく、ご覧下さいまし」

「ご主人もかつては曳き廻しをやつたんでしょうね」
「やりましたよ。わたしも子どものころからですよ。

江差の子どもはね、祭り囃子を子守歌に聞いて育ち、やがて小学生、中学生になると笛や太鼓の祭り囃子を仕込まれる。ついで親と一緒に山車の綱を曳き、若者になると山車を曳き廻す役につく。年代につれて夫々のいくつかの役割を担い、大人の仲間入りに成長していくんですよ」

「だから、お嫁にいつでも祭りには里帰りするんですよ。地方に勤めている息子さんも帰つてきて、また山車にとりかかるんですよ」

と、恵子が相の手を入れる。

そこへ、どやどやと七、八人の田舎風の男衆がやつてきた。

「やあ、上の国のセンセイ方、ようこそおいで下さいました。ハイ、お客様ですよ」

玄関の奥の方から、おかみさんや旅館のおねえさんが、朱塗りのお盆にコップ酒を持って出て来る。その話を聞いていると、民生委員をされている農家の人たちが、

旅館の主人は松山支庁管内の民生委員協議会の会長を
されているようだ。隣町から山車を見にきたのである。

「今年はね、うちの姥神町内会の山車に、息子と孫が
それぞれ役割をもって出ているんですよ。掛け声かけて
やって下さいましー」

おかみさんが笑顔で言うつと、

「中学生の孫は笛を吹き、せがれは綱曳きの大將です
よ。まだまだこれから修業が続きますよ」

主人も御機嫌よく相槌を打つ。

「苦勞するのは金集めですよ。一台の山車を出すのに
三百万円は用意しなくちゃならない。金集めの役をす
る人を「祭りの馬鹿親父」というんですが、この苦勞を
やって、やがて、神輿渡御の猿田彦の役をやるんですね。
この先導役をやるためには、猿田彦の付添人を右側三年、
左側三年やって、ようやく猿田彦の面をかぶって先頭役
をやるんですよ。わたしは三年おつとめしましたがー」
主人のチヨビヒゲや両眼が、ハの字形に踊っているよ
うだった。

この間に、文太郎と恵子は、ようやく旅館の部屋に荷
物を置き、文太郎は上着も脱いで置いて戻ってきた。

町内の一角から、山車の祭り囃子が聞こえてきた。遠
くに、「ヨーイ、ヨーイ」の掛け声が聞こえてきた。そ

のところになると、旅館の前にも近所の人たちが集まって
きて、文太郎も恵子も列の前に立つて見つめていた。

いよいよ山車の第一陣がやってくる。先導者も綱曳き
人も祭りの青い半纏に、赤タスキを掛け、頭を白い手拭
いできりりとしめ、白足袋で大地を蹴りつけるように歩
く。

「ヨーイ、ヨーイ」と大声で唱和すると、神武天皇の
人形を中心に、まわりの笛や太鼓の少年や青年たちを
乗せた、大きな山車の鉄の丸い輪が、ギシッギシッと動
き出すのだ。山車の名前は豊年山という。

両サイドから綱を曳く若者が二十数人、先頭の若者
がまるた旅館の若大將のようだ。

「まるたの若大將いいぞ、いいぞー」

「若大將がんばれ！」

すると、おかみさんやおねえさん方が、

「まるたの健太郎がんばれ！」

「健ちゃんいいぞー」

などと、声援が飛ぶ。

笛を吹く健太郎は笛を休むことができないので、立ち
上がって笛を吹きながら、につこりと微笑んでこたえて
いた。

若大將は、銀色の警笛をもっていて、前を横切る人や

車の動きを笛で制していく進行役だ。声援に対して片手を振って応えていたが、緊張した役割であると思つた。

文太郎も大きな山車が目の前に現れると、さすが自分の体内にも熱い血が走るのか、大声を出して「ヨーイ、ヨーイ、がんばれ！」と声を掛けた。すると、隣にいる恵子が、文太郎の左手を右手で握りしめてきた。彼女も高ぶつてきたのか、彼の肩に頬をすり寄せて大声で「ヨーイ、ヨーイ」と夢中で叫び続けた。

ゆつくりと山車が通り過ぎると、次の中歌町のえびすさまの山車が現れた。ついで新栄町の武田信玄公、本町の加藤清正、橋本町の日本武尊（やまとたける）、茂尻町の大石内蔵助良雄、柏町と南浜町の水戸光圀、津花町の楠木正成、新地町の伊達正宗、豊川町の二二ギノミコト、愛宕町の神功皇后と十三の人形が過ぎるのに一時間余もかかった。

また旅館の前も人通りが消えて、高提灯が灯されて夜の祭りを迎える準備に入る。

文太郎と恵子は部屋に戻り、一風呂浴びた後の夕食は大広間に来客が集まって、賑やかな宴会を催すという知らせだった。文太郎たちはその祭りの旅館のしきたりだということに興味を持って、二人で出席することにした。

その賑やかな会食の席で、旅館の主人から、この祭り

に合わせて北前船が港に碇泊して、祭りの期間中に毎日時間を限定して、船内の見学会を催していることを聞いた。

翌日、二人は海岸通りを歩き、恵子が語つた昔話の舞台の鳴島や瓶子岩を眺めて、港内に向かった。

船体の木肌も新しく、太いマストに白い帆が風にたなびき、船体に「北前船」と筆字で印されていた。十一時頃に着くと、二列に並んだ人々が何分かおきに船体に案内された。

船の大きさは、三厩と福島の間を航海する船ぐらいでないかと思つた。この北前船は全国の青年会議所の会員が主体に募金を募つて復活したものであった。北海道の小樽、岩内、江差、松前から津軽や秋田、山形、新潟、北陸、中国、山口、下関から瀬戸内海に入つて、広島、福山、姫路、神戸、大阪などと寄港して、新しい物産の交流を行う計画がたてられていた。

荷物をおく船内から甲板に上ると、船頭さんの立つ場所やへさきの先端に立つて見ると、波が激しくなつたら被らなければならぬだけに、江差から本州への一航海で二千両とか三千両も稼ぐという話を聞くが、命がけの航海ではないかと思つた。

その船内に流れる歌が、江差追分であった。昨夜の旅館の宴会の席上で、追分を修業中のおねえさんの一席を聞いたが、歌は激しい波しぶきのように流れねばならない、という講釈も聞いた。

しかも、恵子のおばあさんが民謡を歌うのが上手だったという。この江差追分も歌っていたが、節回しが難しいと言われていた。

珍しい北前船の見学が終わってほっとした。文太郎は、江差追分道場が海岸通りの中心街にあるというので足を向けた。

繁華街の一角に古い一軒家の民家の玄関脇に「江差追分道場」という、小型の表札がかかっていた。三味線の音色が聞こえてきて、ふと間をおいて玄関のドアを開けた。靴を脱いで二人はおそろのおそろの廊下を伝って進むと、控えの間があった。その部屋の隣で歌っている。まず二人は控えの間の壁に貼られた写真や説明を読んでいく。

江差追分の源流は、信州小諸の追分宿あたりの馬子唄が、越後に流れ、北前船の船頭や船子によって江差に渡ってきた、と記されている。そして、江差追分の形になるのは、寛政十二年（1800）頃で、江差の座頭の佐之市だと言われる。

昭和三十八年に、江差町で第一回の江差追分全国大

会を開催して、江差追分の旗揚げを同好会の関係者で行う。以来毎年九月頃に全国大会を開催。希望者が増えてきてから全国一〇ブロックで地区予選を行い、三五〇人にしぼりこみ、江差町で三日間の大会コンクールを行って優勝者を決める。こうして江差追分の伝統保存を行ってきた。と、記されていて、江差追分会館を造る計画中であるという。

追分道場の中にそつと二人が入る。「お祭りを見学にきた地方の者ですが、江差追分を聞いておみやげにしたいので見学をお願いします」と、文太郎が会釈すると、「どうぞ、どうぞ。聞いて批判してくださいよ」と、菜っ葉服着た青年が微笑む。

三味線に合わせて、舞台上に立つた若者がまず歌う。ついで、若い女性が歌う。何れも、「かもめの鳴くー」の二十六文字の本歌である。二人とも上手いなと思つた。すると、五十代のおじさんが、「鳴く、という海のカモメの情感が足りないな」というと、浅黒い漁師の顔をした兄さんが、「おれも気張つてしまつて、情感を出すのが難しかった。海の上で静かに歌うように心がけてさー」と、立ち上がつて舞台に立つた。

その若者が昭和四十三年の第六回全国大会で優勝した、青坂満さんだった。

少年時代から漁師として父親と船に乗って働いてきた青坂さんは、夕オルをねじって鉢巻きすると、両股を開いて天井を見つめた、三味線の音に合わせて、白い目玉が大きく光って、やがて目をつぼめて、両手で調子をとるように歌いだした。

出だしの声は太い、と思つたが、次第にかもめが海の汐に乗るように、北風に飛ばされそうになりつつ、その風に乗る感覚が細く、悲しく流れていくのである。胸に迫るものがあつた。恵子は小声で「さすが上手いですね、絶品ですね」と、文太郎に耳打ちした。二人の若者も口をそろえて、

「ありがとうございます。がんばります」

と、笑顔で何回も会釈する。

二十代の青年がこうして練習するうちに、歌い方のコツを覚えるのである。

講師役の青坂満さんは、飾り気のない話ぶりであつたが、早くから優勝候補者の一人だつたが、大会になると気持ちがあがつてしまつて本調子になれなく、第一回以来低迷していた。ところが、昭和四十二年に父親が亡くなり、四十三年春に結核で長患いしていた妹が急逝して、悲しみの中でその四十三年の九月に大会の本番を迎えると、気持ちが落ち着いていて、父や妹の霊前で歌う心

で歌つて、ようやく優勝をかちえたという。

という話を二人は聞いたのである。

江差追分の前歌、本歌、後歌の歌詞は次のようである。

〜大島小島の間とる船はヤンサイエー

江差かよいかなつかしや

北山おろしで行先やくもるネ

おもかじ頼むよ船頭さん

〜かもめのなく音にふと目をさまし

あれが蝦夷地の山かいな

〜沖でかもめのなく声きけばネ

船乗り稼業がやめられぬ

文太郎と恵子は、江差追分を聞いて心が満たされるものがあつた。この日も暑い日であつたが、夕方が近づくると、海風が吹いて涼しくなり、二人はまた祭り囃子が聞こえる海岸通りから、まるた旅館に向かった。

瓦屋根と白壁の古い家並の空地には、赤い花のハマナスの花が咲き競っていた。

つづく

川柳・俳句

伯龍

川柳

少しだけ 老いをかくして 赤い服

時は今 火の粉覚悟で 物を言う

縄文と 弥生を学ぶ 陶遊び

ありがとう その一言が 潤滑油

朝一で 畑の野菜と 会話する

俳句

今年また 心じゃわめく 祭りくる

ネブタ過ぎ 大根種のおとしごろ

気に入りの 器で今日は 冷奴

和みあり 木々に感謝の 冬支度

降る雪に 怨みはないが 愚痴はでる



自治会日誌 ○印 自治会

八月中

6日○青森県の招待により青森ねぶた祭りを観覧

7日○甲田の裾編集局企画運営会議

8日○第21回執行委員会

12日○地区連絡係定例集会

13日○厚生労働大臣と統一交渉団との面談の為、石川会長出張（～15日帰園）

川会長出張（～15日帰園）

16日 歌つこ広場

21日○厚労省「歴史的建造物の保存等検討会」に出

席の為、石川会長出張（～22日帰園）

25日○女 八十二歳亡 青森県出身

30日○内海工業(株)秋田正孝社長、外2名来訪

九月中

2日○自治会選挙管理委員会開催

3日 新城中学校職場体験学習（～4日）

4日 松風塾高校慰問マンドリン演奏

〃 ○自治会選挙 立候補受付

5日○自治会選挙 投票及び開票

5日○保健科運営委員会

11日○平成25年度敬老会

〃 ○第22回執行委員会

13日○福西名誉園長来訪

〃 ○地区連絡係定例集会

17日○9/17付採用 山口美樹也看護助手 挨拶に

来訪

〃 ○横手市結核予防婦人会来園

18日 ゲートボール愛好会バスレク（平内町）

20日 歌つこ広場

〃 ○弥広神社例祭

21日○青森県社会福祉士会来園、石川会長が講演

22日○自治会補充選挙 立候補受付

24日○自治会補充選挙 投票及び開票

27日 広島県慰問

〃 ○第23回執行委員会

十月中

1日○第17回秋季親善交流ゲートボール大会

〃 ○10/1付転任 山口京子看護師、挨拶に来訪

2日○青森市職員研修で石川会長が講演（於 教育

研修センター）

4日 白道会報恩講

〃 〇第1回執行委員会

〃 〇三上武志市議会議員来訪

6日 函館ひとみ会来訪

10日 中央センター2階買い物ツアー

〃 〇曹洞宗北海道第一宗務所一行来園、石川会長が講演

11日 〇国立ハンセン病資料館 稲葉学芸員、金学芸員来訪

16日 〇第2四半期自治会会計業務監査（17日）

18日 〇地区連絡係定例集会

20日 第2センター買い物ツアー

〃 歌つこ広場

21日 〇三上武志市議会議員来訪

22日 〇第2回執行委員

23日 第1センター買い物ツアー

〃 〇新城中学校剣道部による形の演武

〃 〇西部地区住民との交流会で石川会長が講演

（於 西部市民センター）

24日 〇平成25年度物故者慰霊祭

26日 〇女 百歳亡 秋田県出身

28日 〇勸双仁会厚生病院附属看護専門学校看護学科

3年生、施設見学の為来園 石川会長が講演

29日 〇津島淳事務所 清水真秘書来訪

〃 〇秋田県赤十字芸能奉仕団慰問

編集だより

◇保養園の桜を診断して下さった樹木医の逢坂さんから原稿が寄せられ一読し改めて保養園にある桜の木の貴重さを知ることとなった。

さて保養園と県道を結ぶ道路両脇に植えられている桜並木は、逢坂さんによると、「戦中、青森空襲があつたことにより、街中にもあつた桜のほとんどは焼けてしまつたり、またはその他の理由等で、失われ、古木としての桜は存在していない」とのこと。「この度、松丘保養園から桜の木の受診依頼があつたことによつて、七十年以上たつている古木としての染井吉野との出会いがあつた事をまさに奇遇であつた」と感動し、「これも桜の世話をする機会に恵まれた事によるものである」との記事を読み、改めて此所にいつ頃、何方の手によつて桜が植えられたのかと思ひ、もしかして私どもの先輩達が植えられたのか、それ

とも別の人なのか、その経緯は、筆者には知りようがないが。

とかく人は、枝いっぱい咲く桜の頃には、感動し我も我もとカメラを向け写真を取り、老いも若きも桜を愛でるが、花が散り終えれば、振り向きもしない。それは、人間社会にも相通じる様に見えるまで、樹木といえども生有る以上、皆同じかもしれない。特に保養園の桜にあつては、曾ては愚かな人間どもの争いごとで焦土と化した青森市内にありながら、郊外に位置しているためか、またハンセン病の施設と知つて当事者達は避けたのか、いずれにせよ、いろんな時代をくぐり抜けた七十年という歴史の中で数多くの人びとの営みを見届けてきた桜に、樹木の力強い生命力には、改めて驚かされる。

このように今や古木となつてしまつた桜は、楓公園西側に隣接している中学校の通学路であるために多くの子供達の成長していく姿、入所者に対する人権蹂躪されている姿も、また、望郷の望みに涙し悲喜こもごもの人生模様をも見続けてきた古木は、さらに人間の身勝手さに電線の邪魔になるからと枝を切りとられ、その切り口から雨

水が入り腐敗し、何時朽ち果てても、おかしくない状況下でありながらも、巡り来る春には鳥による被害が及ばされない限り、爛漫と咲き、私たち入所者を始め、多くの地域住民にも親しまれ、時には家族連れの賑わいも見られ、なんともほほえましい光景も目にもすることもあつた。この様な憩いの場としての景観を何としても残すべきと、関係省庁に働きかけたが、一考だにしてもらえなかつた。それが、この度、園関係者の配慮によつて樹木医による診断を受けるチャンスに恵まれた桜は、土壌改良、その他の手当等も得られるようになった。また県道と環状線とのアクセス道もなつているために、特に冬ともなると、そうでなくても常日頃、狭く感じる道路は、さらに狭くなり、車同士との接触を回避するために除排雪によるローダー傷が桜の木に残り、その傷跡から腐敗するといった悪循環になつていたのである。冬の除排雪等の対策も取つたうえ、市の除雪関係者に対しても配慮を依頼したと聞き安堵すると共に、来春、桜はきつと答えてくれるだろう、桜花爛漫と。

(佐藤 勝)

◇保養園の樹木に関して、故 伊藤文男氏が平成四年五号の「甲田の裾」に残した文章を掲載しますので、「一読ください。」

「自然と緑を残そう」

伊藤文男

・・・(前文略)・・・

私たちにとつて第二の故郷ともいえる青森市も飛躍的に発展し、区域的にも拡大しているようですが、必然的に自然が破壊され緑が失われるようになりました。

お世話になった地域へのお返しは何かを真剣に考えるようになりました。その結果、広大な市街地の中に貴重な緑を残そうということになり、五年前から緑化委員会を設け植樹に力を入れるようになりました。

この五年間におよそ千五百本の各種樹木を植え、今後とも続けて行くつもりでおります。「ここに保養園ありき」の証しと、とこしえなる地域との連帯の証しとして、松丘の自然と緑を心から謝意を込めて贈りたいと思っております。

人事異動

【採用】



看護助手 山口 美樹也
(期間業務職員・病棟勤務)
(平成25年9月17日付)

少しでも早く、みなさんの顔と名前が覚えられるよう頑張ります。

【転任】



看護師 山口 京子
(青森病院より 病棟勤務)
(平成25年10月1日付)

少し年はとつていますが、毎日緊張しながら過ごしています。元気ががんばりますので皆様よろしくお願ひします。

園内の出来事

○松風塾高校マンドリン演奏会 9月4日



2年生10人によるマンドリン演奏。3日より職場体験に訪れていた新城中生も暫し緊張から解放され入園者と共に演奏を楽しみました。

○新城中学校剣道部 慰問 10月23日



新城中学校剣道部15人がボランティア活動の一環として剣道の「形」を披露。木刀・竹刀を使った「形」は真剣勝負さながら。息を呑む迫力がみなぎってました。

○秋田県赤十字芸能奉仕団慰問 10月29日



唄、踊り、尺八演奏と芸達者な31名が今年も舞台狭しと演芸を披露して下さいました。

国立療養所松丘保養園要覽

松丘保養園は国立のハンセン病患者の療養所で、創立してから今年で104年の歴史があり、ハンセン病患者の医療と福祉を事業としております。

所在地

青森市大字石江字平山十九

園長 川西健登

保有敷地 二三〇、五四八平方メートル
(六九、八六三坪)

建て面積 三〇、三五八平方メートル
(九、一九九坪)

延べ面積 三六、〇三六平方メートル
(一〇、九二〇坪)

交通案内

□電車の便

1. 東北新幹線・新青森駅下車

(車で約3分)

2. 奥羽本線津軽新城駅下車

(車で約5分)

□バスの便

1. 青森市営バス西部営業所行

2. 弘南バス浪岡・五所川原・黒石

行き 共に松丘保養園前下車

□航空機の便

青森空港より(車で約30分)

□高速自動車道の便

青森ICより(車で約5分)

□なお保養園に隣接して桜の名所三内霊園(1km)と国の特別史蹟指定の三内丸山縄文遺跡や県立美術館(2km)等があります。

発行所

財団法人 松丘保養園慰安会

所在地

〒〇三八―〇〇〇三

青森市大字石江字平山十九番地

電話(017)(788) 〇一四五・〇一四六

発行人 川西健登

編集人 甲田の裾編集委員会

印刷所

青森市本町二丁目十一―十六

青森オフセット印刷株式会社

電話(017)(775) 一四三二番